

エンカウンター (ENCOUNTER)

第233号

2021年9月1日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

小西芳之助導源先生「コリント人への第1の手紙講解説教」より (3)

パウロ自身による十字架の説明

本日は、コリント前書1章18-31節までの大意を学びたいと思います。…まず信仰の問題、信仰の本質についてこれから論ずるのであります。愚かなる十字架の伝道であります。信仰の客体と申しますか、何を信じるか、信ぜらるるものにつきまして、パウロは18-25節で述べたのであります。信ぜらるるもの、主イエス・キリストの十字架、これは信仰の客体でありまして、我々は主イエス・キリストの十字架、即ち、十字架において現れた神の贖を信じるのでありまして、これがコリント前書の主題であるのみならず、パウロの書きました全ての書簡の主題であります。……ロマ書も、一言にして言えば、このイエス・キリストの十字架の贖いにつきますのであります。18-25節までは、十字架を説明する言葉としてパウロ自身が用いた言葉です。……この聖書の最も良き注解は聖書自信であるという感を深くします。パウロ自身の説明に優る説明は有りません。「読書百遍にして義自ずからあらわる」という言葉があります

けれど、特に聖書の大事な場所に当たっては、人間の注解はむしろ益にならず害になる。聖書の本文それ自身が最も有力なる注解です。コリント前書の1章18－25節がパウロ自身が行った十字架の説明であります。

神の国は言葉にあらず、力である

十字架の言は、滅び行く者には愚かであるが、救いにあずかるわたしたちには神の力である。(1:18)

即ち、聖書に、「私は智者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さをむなしのものとする」と書いてある。(1:19)

これが大体十字架の説明であります。「滅びゆくもの」というのは信ぜざる人です。信ぜざる人には、十字架の贖いというのは、愚かに見えます。しかし、救われる我々には、神の力であります。力とは、救いに至る力です。物を動かす力ではない。パウロは、神の国は言葉にあらず、力であると言いました。

この世の知者、この世の哲学を、神は空しいものとする。……この世の人間の哲学、この世の人間の知恵というものが、果たして我々に本当の命、本当の平安と喜びを与えておられますか。カントの哲学は、本当にすべての人間に力と命と喜びを与えますか。…人間の考えました哲学、これはカントの哲学が最高峰とされているそうですありますが、それが本当に命と喜びと感謝とを与えているというのであれば、私に聞かせてほしい。私は、これからカントを勉強します。理は深いかもしれませんが、命を与えるものではありません。

宣教の愚かさ

この世は、自分の知恵によって神を認めるに至らなかった。それは、神の知恵にかなっている。そこで神は、宣教の愚かさによって、信じる者を救うこととされたのである。(1・21)

人間の知恵と人間の行ないをもってしては、本当に人間に命と救いを与えることは出来ないということを神は見てとって、救いの道を神の方から啓示しました。これが十字架です。「神の宣教の愚かさによって、信じるものを救うこととされた。これが十字架の意義です。「宣教の愚かさ」というのは、十字架の宣教の愚かさということです。「宣教する」ということは、愚かなことではない。英語聖書では、folly of what we preach と書いてあります。英語では、「われわれが宣教するところのそのものの愚かさ」と訳してありますが、この英訳でよく意味が分かると思います。十字架は、愚かに見えることです。その愚かに見える十字架を宣教する事によって、神は人を救うという方法を考えた。これが神の知恵であるという。神の提供された救いの方法です。その方法は、非常に愚かに見える単純な十字架の贖いを信じるという方法、これを神が提供したという。

神の方からの救いが十字架の贖い

ユダヤ人はしるしを乞い、ギリシア人は知恵を求め。しかし私たちは、
十字架につけられたキリストを宣べ伝える。(1・22)

これをもっと現代的に言えば、我々人間のこね上げた哲学、求道、即ち聖書の勉強、知識によらない。また我々の、万人が尊敬するような立派な行ない、イエス・キリストが遺し給うたような立派な行いによって、救いを勝ち得ようとする行ないにもよらないと言う。…そういうものを超えて、神の方から救いを提供しているという。これが十字架の贖いです。

これはキリスト教に限りません。浄土門の念仏は、私には十字架に見える。また禅宗の座禅も、私には十字架に見える。念仏でも座禅でも、人間の努力、人間の求道、あるいは人間の行ないを超えたものであります。人間の全ての知恵、人間の全ての行動を超えた向こうから提供された救いです。そういうものを人間が人類の2000年の歴史で発見した。それを宗教という。…人間の精神的努力は、ギリシア人の知恵と言ってもよろしい。実行的努力は、ユダヤ人の知恵と言ってもよろしい。宗教の極意は、そういう行ないによって勝ち得るものではありません。向こうから提供されているものです。……聖書に、信じる者はすべて救われる、「誰でも」という原理はここから出てきます。百年やった人でも、今日始めて聞いた人でも救われるというのは、ここから出てきます。私は、宗教の極意はここに在ると思う。

十字架の贖いの意味

このイエス・キリストの十字架の贖いというものは、パウロの言葉でいえば、コリント後書 5 章 19 節にある「神は、イエスキリストの十字架において、われわれと和解をしたもうた。」に尽きる。神の方から我々に和解 (reconcile) して、と書いてあります。キリスト教は、我々の方から求めるものではありません。神の方からキリストの十字架を通して、迫ってきている。これをキリストとの出会いという。…ここにわれわれの平安があり、喜びがあり、生命 (いのち) があるのであります。

どうぞ、虚心坦懐にこのコリント前書 1 章 18 節から 25 節までを大きな声で、密室で読んで下さい。聖霊自身が、真理の御霊自身が諸君に教えてくれます。これを人間は教えられません。これはコリント前書の主題であるのみならず、これはパウロの全書簡の the dominant theme であります。我々の無知、無力、無価値を知ったときにこれが分かります。これが分かったときに、また自分の無知、無力、無価値が分かります。パウロは「我は罪人の頭なり」と言ったのはそれです。十字架が分かった時に自分の罪の深さが分かる。自分の罪の深さが分かった時に、十字架が分かる。これが 25 節までの大意です。

人を愛する力はどこから来るか

本当に善を行う力、本当に人を愛する力はどこから出て来るか。私は善とか、愛とかは欲しくありません。愛の行ないをしたいと、重荷になっている人は愛の行ないは出来ません。愛を行なう力はどこから来るか。それが問題です。我々にいかに良い手本を示されても、我々にはそれを行なう力はありません。この善を行なう力は、我々がキリストの十字架の贖いによって、花嫁にされているというところから来ます。我々の品質は劣っているけれども、この十字架の贖いによって神の子とされ、永遠の生命を与えられていて、宇宙完成の時には、キリストの花嫁となる資格を持つ。そこから力が出て来る。そこから我々は分相応に励まされて、善をなす力が出て来る。我々がキリストの花嫁とされているところにわれわれの力の根源があります。これは、向こうからの恵みです。我々の人間的な行い、信仰によりません。神から提供されています。それを受けること、信じることを「信仰によって救われる」と言うのであります。人間の信仰ではありません。「信」は、十字架から来ます。十字架が我々に届くことを信仰というのです。十字架は、神の正義と神の愛との会うところなのです。この十字架の贖いは、この世の知恵やこの世の行為によって、救いを勝ち取ろうとする者にとっては、愚かに見えます。

イエス・キリストは義と聖と贖い

あなた方がキリスト・イエスにあるのは、神によるのである。キリストは神に立てられて、わたしたちの知恵となり、義と聖とあがないとになられたのである。(1・30)

内村先生は、聖書全体を1節につづめたら、この節となると言われました。あるとき先生は、個人雑誌『聖書の研究』の巻頭で、「汝らは神の力によって、神の導きによって、イエス・キリストにあり。イエス・キリストは、神に立てられて汝らの知恵となり給うた。その知恵の内容を言えば、汝らの義と聖と贖いとなり給うた。」と書かれました。……この贖いと言い、贖いまでの清めの生活、信仰の生活も、信仰の初めも、途中も終わりもすべて、我々の義、聖、贖い、イエス・キリストの贖いから来るといことです。我々はそれに何も付け加える必要はありません。パウロの思想、パウロの信仰、パウロの命を一言で言い表したら、コリント前書1章30節になります。どうぞ、この30節を繰り返し読んでみて下さい。

最高の知恵は、哲学ではありません。最高の知恵は、永遠の生命を生きるにあります。我々は、喜びと感謝をもって生きることが最高の知恵です。…最高の知恵、最高の哲学、最高の行いは、我々自身が永遠に生きることであり、神と共に生きることは、イエス・キリストの十字架の贖いを通じて、われわれに下さる神の賜物であります。

十字架の宣教

十字架の言は、滅びゆくものには愚かであるが、救いにあずかるわたしたちには、神の力である。(1・18)

この世は、自分の知恵によって神を認めるに至らなかった。それは、神の知恵にかなっている。そこで神は、宣教の愚かさによって、信じるものを救うこととされたのである。(1・21)

十字架の宣教と言えば、キリストが十字架に架かって、我々の罪咎を贖って、我々に救いを下さった。我々に神の子とする信仰と、復活の望みをかなえて下さったということです。これが宣教です。……

われわれはこの信仰を受けて、続けていたらよろしい。続ける方法は、「我が主イエスよ」と、主の名を呼ぶことでもあります。主の名を呼ぶこと、この宣教ということ、十字架の教えを述べることは、神の召しによっています。

…私の説教も 20 年間、同じことを繰り返しておりますが、これも神の召しによっています。私は、私自身の知恵と、努力奮闘でやっているのではありません。私は、神に召されてこういうことを言っているのではありません。

パウロ、異邦人に遣わされた使徒

ある人が、君の言葉は、ロマ書や、コリント前書でパウロが書いた言葉であり、イエス・キリストの言葉ではないので、あまり厳しいことは言えないのではないか、という批判があるかもしれません。それに対して、私は答える。イエスご自身が、「われが遣わすものを信じるは、われを信じるなり」と言われた。私は、パウロは、イエスに遣わされたものであると信じています。ロマ書、コリント書は、パウロによって書かれたことは学者の一致するところです。そうですから、私は、パウロの書いたこれらの書簡を信じるということは、イエス・キリストを信じることになるかと確信しています。そして、特にパウロは、異邦人に遣わされた使徒であります。ヨハネ、ペテロは、ユダヤ人に遣わされた使徒であることは聖書に書いてあります。そうですから、異邦人である日本人がパウロの言葉を信じるということは、実に聖書的信仰であります。

聖霊による啓示

それを神は、御霊によってわたしたちに啓示して下さったのである。御霊はすべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめるのだからである。(2・10)

神は聖霊を降して我らに説明しました。聖霊によってこれを明らかにした。啓示 (reveal) したと言っております。聖霊 (spirit) という言葉をキリスト教に持ち来たしたのはパウロです。もちろん、イエスも仰せになりましたが。この聖霊ということばがコリント前書に最もたびたび用いられている。コリント前書は、まことに不思議なる書であります。即ち、我々の信仰は霊の賜物であると言う。人間の努力、人間の知恵から来るものではない。聖霊が我々に臨むことによって知恵を賜る。通ずると言うことは、共通の精神によって通ずる。…聖霊なきところでは十字架は分かりません。

ジョン・ウエスレーはどうですか。ウエスレーという伝道師は、学問をしていましたから、地についた学問の説教師でした。それが一度聖霊が彼に下った時、人類の、福音の教師となったではありませんか。メソジストはかくのごとくして興りました。我々人間の能力ではいかに微弱であっても、我々に一度、聖霊が臨む時に人間の能力の可能性は無限大となります。

神の霊

聖書の真理というものは永遠の真理でありますから、10年前に話しましたこの話が今日話してもそのまま通ります。医者や学問の学説などは、たいてい5年、10年で変わるようでありませうけれど、聖書の真理は変わりません。

パウロの宣教はイエス・キリストの十字架であります。十字架にどういう意義があるかという、これは贖いです。ペテロ前書2章24節には、「わたしたちが罪に死に、義に生きるために、十字架に架かって、わたしたちの罪をご自分の身に負われた。その傷によってあなたがたはいやされたのである。」とあります。これはペテロが説明しました。キリスト教の全てはキリストの贖いということ。十字架というものは、人のために命を捨てる手本として、我々のなす善行の手本として十字架につけられたものではありません。イエス・キリストの十字架の意味は、我々の罪を荷って罪を処分して、我々に永遠不滅の生命を与えて下されたということです。これがキリスト教の全て。…このイエス・キリストの贖いというものをわからせるのは神の霊。神の霊が働いて我々は分かせて頂く。神の霊が分かるということは神の霊を頂いたことになる。それをわかっている人を「霊の人」と言う。分からない人は「肉の人」「生まれつきの人」であります。